

報 告

思春期広汎性発達障害男児への
性教育プログラムの検討

—試行的実践からの分析—

川上ちひろ^{1,2)}, 辻井 正次³⁾

〔論文要旨〕

広汎性発達障害児の中には思春期になると性的な行動やその対処方法において課題や問題が顕在化する児がいるといわれている。しかし日本において、広汎性発達障害の障害特性に起因する性行動に対処するための性教育の研究や実践は、系統だったものになっていないことが多い。

今回広汎性発達障害男児をもつ保護者への調査をもとに、男児らの障害特性を考慮した性教育プログラムを計画し実施した。

その結果、男児・家族ともプログラム評価は肯定的なものが大多数だった。また数名の男児と保護者に行動や意識の変化がみられた。今後広汎性発達障害児への障害特性に特化し、また女性との関わり方などを含めた性教育プログラムの開発の必要性が感じられた。

Key words : 性教育, 広汎性発達障害, 男児, 思春期

I. 背景と目的

広汎性発達障害 (pervasive developmental disorder 以下 PDD) 児の中には、思春期を迎え二次性徴が発現する時期になると性的な行動やその対処方法において課題や問題が顕在化する児がいるといわれている¹⁾。たとえば“裸のまま人前を歩き回る (露出)”や“人前でズボンに手を入れて陰部に触れる (性器いじり)”や“女性をジーっとみつめる (異性への不適切行動)”や“女性の下着や写真を集める (収集・執着)”など、社会生活上適切でない性的な行動をする児がいることが報告されている^{2~5)}。そして彼らに関わる保護者や教師など周囲の人々は、そういったふるまいへの対応について非常に苦慮している⁵⁾。しかし PDD の問題のある性行動に対処するためには事例検討のことが多

く、性教育の研究や実践は系統だったものにはなっていないことが多い^{6~9)}。

現在、性に関する知識や適切な性行動の習得は、家庭での実施が必要と考える保護者は多いが実際には家庭で実施に至ることが少なく、学校での性教育に頼ることが多い^{10,11)}。この学校での性教育で重要視される内容は、二次性徴による男女の身体の成熟などの科学的知識、人間尊重や男女平等の精神を養うこと、男女交際にかかわる避妊や中絶、エイズや性感染症の正しい知識と行動、大量の性情報との適切な関わり方などである¹²⁾。学校で教育されるこのような内容は、そのときの若者たちの性に関する問題行動など社会背景や時代のニーズによって変化していくものだろう。性教育は現代の若者たちがめまぐるしく変化する社会の中で、問題を起こさず適切に対処できるよう実施が望

A Study of Sex Education for Male Adolescents with Pervasive Developmental Disorder

[2138]

— An Analysis Based on a Practical Trial —

受付 09. 5. 14

Chihiro KAWAKAMI, Masatsugu TSUJII

採用 11. 3. 1

1) 名古屋大学大学院医学系研究科健康社会医学専攻精神健康医学分野 (保健師/養護教諭)

2) 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター (保健師/養護教諭)

3) 中京大学現代社会学部 (臨床心理)

別刷請求先: 川上ちひろ 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター 〒501-1194 岐阜県岐阜市柳戸1-1

Tel : 058-230-6470 Fax : 058-230-6468

まれている¹²⁾。また特別支援学校においても性教育が同様に取り組まれている。それらはいわゆる社会的に弱い立場にいる障害を持つ子どもへの性のノーマライゼーションや自立、理解度がゆっくりな子どもたちへの性被害予防や問題行動を防ぐための準備教育であることが多い^{13~15)}。その主な内容は男女の体の違い、二次性徴、生殖に関することである。

しかしPDD児を持つ保護者に行った性教育のニーズアンケートでは、学校で性教育を受けているにもかかわらずそれでは不十分でさらに子どもへの性教育を追加する必要性を強く感じていることが示されている¹⁶⁾。具体的には二次性徴による身体変化やその対処方法、異性との関わり方、性情報の扱い方、男性としてのふるまい方など具体的な行動面における対処方法について子どもたちのニーズに合わせて教えてほしいという要望が多くあがった⁵⁾。保護者が心配しているのは子どもたちの性行動に関することであって、必ずしも男女の体の違い、二次性徴、生殖に関する内容ばかりを望んでいるわけではなかった。

知的障害のないPDD児の場合は発達に応じた理解ができるので、知識の不足というより周囲の状況が察知できないという障害特性によって不適切行動を引き起こしていることが想定される^{1,2,17)}。知識はあるが実際の行動への転換ができず、適切な行動につなげることが難しいのかもしれない。そのため、周囲が驚くような“裸のまま人前を歩き回る”、“人前でズボンに手を入れて陰部に触れる”、“女性をジーっとみつめる”などの行動をするのだらうと考えられる。PDD児の場合、提供のみでは適切な行動変容に至らないことを示しているのだらう。

今回事前に保護者アンケートから得られたPDD児の性にまつわる場面での不適切行動に焦点を当て、適切な行動を具体的に学ぶ性教育プログラムを試行的に実践した。その評価には、プログラム前後でのPDD児、

保護者、支援者のアンケートの分析を用いた。そしてそれらの結果から、今後のPDD児のための性教育プログラムを検討することを目的とする。

II. 対 象

PDD児の支援団体であるNPO法人アスペ・エルデの会に所属する中学生、高校生のPDD男児とその保護者である。

内訳は以下の通りで、PDD男児：中学生23名（IQ70未満5名、70以上18名）、高校生16名（IQ70未満3名、70以上13名）、保護者：事前調査は男児と同数、事後調査は中学生20名（IQ70未満5名、70以上15名）、高校生14名（IQ70未満2名、70以上12名）の協力が得られた。

III. 方 法

1. プログラム実施

2007年8月にアスペ・エルデの会に所属するPDDの子どもたちのサマーキャンプ（4泊5日、愛知県南知多郡日間賀島）を行った。このキャンプで子どもたちは家族から離れて仲間との集団生活を通じて仲間と協力して作業に取り組み達成感を体験しつつ、身支度等の日常生活スキルを養うことなどを目的としている。また海水浴や釣りなどの海洋体験を楽しむ一方、リラクゼーション、感情理解などのプログラムも受講することになっておりその子に必要なスキルの習得を目指している。この期間中に性教育プログラムを実施した（表1）。

2. プログラム構成

事前調査としてアスペ・エルデの会のPDD男児の保護者に“子どもの性行動の現状や問題、保護者のニーズ”を尋ね、その結果プログラム内容で要望が高かった以下の3つの課題を抽出した²⁾。

表1 サマーキャンプのスケジュールおよび活動内容

	6:00	7:00	9:00	12:00	13:00	14:30	16:30	18:00	19:00	22:00		
1日目			(集合)	昼食	海洋体験		入浴	夕食	夜の活動	反省会	就寝	
2日目	起床	清掃活動	朝食	プログラム	昼食	【性教育】	海洋体験	入浴	夕食	夜の活動	反省会	就寝
4日目	(活動の詳細)											
	清掃活動：海岸や道路のゴミ拾い				プログラム：感情理解、リラクゼーション、自己理解など							
	海洋体験：海水浴、筏作り、釣りなど				夜の活動：キャンプファイヤー、スターウォッチングなど							
	※【性教育プログラム】は中学生・高校生の男子を対象に実施した。											
5日目	起床	清掃活動	朝食	プログラム	昼食	(解散)						

- [1] 身体の変化（二次性徴による身体の変化の知識とその対処方法の確認）。
- [2] 女の子との接し方（異性との適切な接し方と適度な距離のとり方とその実習）。
- [3] 性情報の対処方法（性的な情報をどのように扱うのが適切なのか）。

3つのカテゴリーでそれぞれ実際に起こりそうな場面をいくつか想定して挙げ、その場面でどうするのが適切なのか考えることを課題として設定した。それぞれに適切な対処例を示しながら、自分の行動に置き換えて考えることができるように進めた。個人の理解を促進するよう個別に記入するワークシートを作成し用いた（表2）。なおプログラムの内容については実際に男児が使用したワークシートを通じて、サマーキャンプ後にそれぞれの保護者に報告した。

3. プログラム進行

中学生・高校生男児全員に、1つのカテゴリーで1

～1.5時間かけて行った。筆者（川上）が全体のコーディネートを行いながらプログラムを進め、サポートスタッフ（教育系や心理系などの大学生・院生）が中学生は一对一の個別に、高校生以上は小グループに一人ずつつき理解を促進するための支援を行った。

4. プログラム評価

以下の(1)～(4)の結果からプログラムの評価を行った。

(1) PDD 男児アンケート（プログラム初日と最終日にアンケートに記入しまとめた）、(2) 保護者アンケート（プログラムに対する事前調査と実施後の事後調査に記入しまとめた）、(3) サポートスタッフからの報告（中学生をサポートしたスタッフが取り組みの様子を観察しその報告をまとめた）、(4) プログラムを進めた筆者による児らの様子の観察（プログラムを進行した筆者が、児らの取り組みの様子をまとめた）。

この性教育プログラムの実施についてはアスペ・エルデの会の倫理委員会の承認を受けている。なおアン

表2 性教育プログラムで使用したワークシート（抜粋）

[1] 身体の変化について

できごと（事例）	対処方法の例
①射精してしまい、下着を汚してしまった	♪お風呂や洗面所で下着を洗ってから洗濯機へ入れる ※下着を汚してしまったら自分で洗きましょう
②人前でペニスが大きくなってしまい、服の上から目立ってしまう	♪上着でかくす ※他人にわからないようさりげなくかくしましょう

[2] 女の子・女性との接し方について

できごと（事例）	対処方法の例
①教室で好きな女の子に抱きついたり、後をつける	♪話題をみつけて話しかける ※人前で女の子に抱きついたり、後をつけたりしない
②水着やミニスカート姿の女の子をジーっと見つめる	♪ちらっと見てすぐに違うものを見る ※ジーっとは見つめない

《演習》 女の子・女性との距離のとり方 ～お互いが心地いい距離はどれくらいだろう～

- (1) 中・高校生男の子とスタッフ（できれば女性）とペア（グループ）を作ります。
- (2) 二人が約3メートル離れて立ちます。
- (3) 中・高校生男の子から、スタッフに向かって一歩ずつ近づいていきます。

[3] 性情報への対処方法について

できごと（事例）	対処方法の例
①女性の水着や下着の写真的切抜きをたくさん集めているので、クラスの女の子に見せてあげたい。	♪知り合いの男性に見せる ※女性・女の子には見せないほうがいいでしょう
②家族でテレビドラマを見ていたら、急に男女が抱き合っている画面になったので驚いて大きな声を出してさわいでした。	♪自分が見たくない画面になったら、目を閉じる ♪隣の部屋へ移動する ※大きな声を出したり、さわいだりしないほうがいいでしょう

♪ それぞれのできごと（事例）について、「自分ならどう対処するか」を尋ね、※ その後に対処方法の例を示した。

ケートは今後の支援につなげるため、記名式で行った。

IV. 結 果

1. PDD 中学生・高校生男児アンケート (表3)

(中学生23名: IQ70未満5名/ IQ70以上18名, 高校生16名: IQ70未満3名/ IQ70以上13名)

事前アンケートの「性に関する事で知りたいことはありますか」の記述回答で, 中学生 IQ70未満で「たくさんご飯を食べる, 体を詳しく知りどのように成長するかも知りたい」, IQ70以上で「体のこと, にきびはどうしてできるのか」などがあつた。高校生 IQ70未満で「女友だちとの接し方」, IQ70以上で「身長がどんどん大きくなる, 身長がどの辺りまで伸びたか, 身長は伸びているか, 普通の授業(公民・保健)以外にもいつどのような変化の課程があるか」があり, 主に身体の変化に関して知りたいという回答が多くみられた。

事後アンケートの「プログラムを受けてみてどうでしたか」では中学生 IQ70未満で“とてもよかった・よかった”と回答した児の記述回答は, 「体の変化について, 対処方法が書いていました, 自分はどうするか, お尻のことも参考になりました, テレビのこと」, IQ70以上で「自分がどうしたらよいか何となくわかりました, 女の子にどうやって接するかわかつた, 実生活でありそうな例とその対処法」, “ふつう”の記述回答では「どうしたらさらわれるかわかつた, 女の子・女性との接し方, 演習などしてみてもおもしろかつた」があつた。高校生 IQ70未満で“とてもよかった・よかった”と回答した児の記述回答は, 「女性との関わり方がわかつた」, IQ70以上で「いろんな“性”がよくわかつた, 僕がやっていない事例での対処方法が理解できたのでよかつた, 人間は男も女も関わり方がわかりました, 距離の演習が今後の付き合い方の参考になった」, “ふつう”の記述回答では「女性との接し

方, 自分の行動に何があるかわかつた」などがあつた。

2. 保護者アンケート (表4)

①事前調査

(中学生保護者23名: IQ70未満5名/ IQ70以上18名, 高校生保護者16名: IQ70未満3名/ IQ70以上13名, ※父親の回答が中学生・高校生の IQ70未満・IQ70以上で各1名含まれる)

「お子さんに対して性に関する事を話す必要があらうと思いますか」では大多数の保護者が“必要があらう”と回答した。またその内容は中学生 IQ70未満保護者で「女性との関わり方(1名)」, 「性交・避妊・性感染症(1名)」, 「恋愛(1名)」, IQ70以上で「身体変化について(6名)」, 「女性との関わり方(3名)」, 「性情報について(2名)」, 高校生 IQ70未満保護者で「女性との関わり方(2名)」, IQ70以上で「身体変化について(マスターベーションなど)(3名)」, 「性交について(3名)」, 「性情報について(2名)」, 「女性との関わり方(1名)」, 「性的興味は悪いことではない(1名)」, 「妊娠・出産について(1名)」, 「男性としてのマナー(1名)」, 「愛について(1名)」の回答があつた。また中高生, IQ の程度にかかわらず「本人に合つた内容をわかりやすく行ってほしい」という回答が多くみられた。

②事後調査

(中学生保護者20名: IQ70未満5名/ IQ70以上15名, 高校生保護者14名: IQ70未満2名/ IQ70以上12名, ※父親の回答が中学生 IQ70以上, 高校生 IQ70未満・IQ70以上で各1名含まれる)

プログラムの実施やその内容については肯定的な評価が多かつた。

「本人に行動の変化がみられましたか(1ヵ月後に調査)」では, 中学生 IQ70以上保護者で「女の子に何メートル以上近づいていいのか, チュー(人前でキス)

表3 PDD 中学生・高校生男児のプログラム前後アンケート

所属	中学生 (n=23)								高校生 (n=16)							
	IQ70未満				IQ70以上				IQ70未満				IQ70以上			
スケール (各質問項目内を参考)	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
<事前>性に関する事で知りたいことはありますか 1:ある, 2:ない	3	2	-	-	5	13	-	-	1	2	-	-	4	9	-	-
<事後>プログラムを受けてみてどうでしたか 1:とてもよかった, 2:よかった, 3:ふつう, 4:わるかつた	1	3	1	0	6	3	7	1	2	0	1	0	3	4	6	0

表4 保護者のプログラム前後アンケート

所属	中学生保護者 (事前 n=23) (事後 n=20)								高校生保護者 (事前 n=16) (事後 n=14)							
	IQ70未満				IQ70以上				IQ70未満				IQ70以上			
IQ	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
スケール (各質問項目内を参考)																
<事前>お子さんに対して性に関する話を話す必要があると思いますか 1: はい, 2: いいえ, 3: わからない, 4: 未記入	4	0	1	-	15	1	1	1	3	0	0	-	10	1	2	-
<事後①>プログラムを行ったことについて 1: とてもよかった, 2: よかった, 3: どちらでもない, 4: 必要なかった	1	3	1	0	4	7	3	1	0	1	0	0	3	9	0	0
<事後②>プログラムの内容は適切でしたか 1: とても適切だった, 2: 適切だった, 3: どちらでもない, 4: 不適切だった	0	2	3	0	2	8	4	1	0	2	0	0	1	9	2	0
<事後③>プログラム後, 本人に行動の変化がみられたか (1か月後に調査) 1: あり, 2: なし, 3: 不明	0	3	2	-	4	8	3	-	1	1	0	-	0	6	6	-
<事後④>プログラム後, 家族の間で意識の変化がみられたか (1か月後に調査) 1: あり, 2: なし	0	5	-	-	5	10	-	-	0	2	-	-	0	12	-	-

は絶対にだめだねと言うようになった, 本人が注意しようと努めているようだ, 妹が風呂上りに裸のままいたら「見ないよ」と言って顔をそむけて通っていったことがあった, 母親の下着を部屋に持って行き布団に隠したことがあったが今は落ち着いている, 高校生 IQ70未満保護者で「副担任の先生 (女性) が気になってじっと見ていたり注意を引こうとしていたのが少し距離を取れるようになった, 妹の部屋に勝手に入らなくなり妹が薄着でいると注意するようになった」という兄の行動が報告された。また「家族の間で意識の変化がみられたか (1か月後に調査)」では, 中学生 IQ70以上保護者で「家族の前で服を脱ごうとしたとき合宿でどのように勉強してきたかを思い出させ考えさせるような声かけができた, 女の子に近づくときは「何メートル以内?」と聞くようになった, 合宿中に性についてどのように話したのかを確認し行動を規制するための指針にすることができた」等の回答があった。

3. サポートスタッフからの報告のまとめ

中学生 IQ70未満の実習中のポジティブな面では「自分の身の回りの人に置き換えてイメージできていた子がいた, 選択式の問題は (子どもにとって) わかりやすいと思う, 本人がどの程度理解できているのか把握することができた, ネガティブな面では「用語 (“ペ

ニス” など性に関するもの) に過剰反応 (笑う, “気持ち悪い”, “変態” と言う, テンションが高くなる) した子がいた, あらかじめ「やってはいけないこと」という (子ども本人なりの) 理解があるようで, そのことが課題の場面をイメージするうえでの妨げになっていたようだった」などがあった。

また中学生 IQ70以上のポジティブな面では「話の内容をメモしていた子がいた, 自分なりに考えていた答えと説明内容と合っていたと喜ぶ子がいた, 知識としては理解していた子がいた, ネガティブな面では「プログラムへの取り組みを過剰に嫌がった (寝転がる, “やめろ!” と言う, イライラする) 子がいた, 質問の意味や説明する場面がイメージできない (男女のイメージがわかりにくい, 質問を自分に置き換えることができない, 基本的な用語の理解が不足している) 子がいた, 演習で女性と近づくときに非常に緊張している感じの子が数人いた」と報告があった。

4. プログラム進行者 (筆者) の観察

ポジティブな面では, 身体の名義や働きなど基本的な知識は理解している子どもが多いようだったので (一部に内容が難しく理解できずにパニックを起こしてしまった児がいたが), 全体で話を進めるうえでの難しさは感じなかった。女性との距離の演習をスタッフに誘われながらも積極的に取り組んでいる子ど

もが多く、実際にやってみたことで理解できた様子の児が多かった。ネガティブな面では、学校で習って「知っているから」勉強しなくてもいいと真面目に取り組まず、スタッフが対応に苦慮している児がいた。「性教育を行うこと」、「ペニス（などの生殖器の名称）を人前で話すこと」に対し過剰な抵抗感を持つ児が数人いたり、「ペニスなんて言葉に出したらいけない!」とパニックを起こし参加が難しい児がおりプログラム進行が難しかった部分もある。女性との距離の演習中女性スタッフに間近まで寄って話をしたり触れたりする児がいて、スタッフが困惑していた。

結果のまとめとして、性教育プログラムに対してはほとんどの児が“よかった”と肯定的な評価をし、“ふつう”と回答した児でも何らかの参考になった項目があったようだ。事前アンケートで数名の児が性に関することで知りたいのは身体（身長）の外見の成長に関することだと回答していたが、事後アンケートでは実際に演習を行った女性との関わり方で参考になったと答える児が多く、自分のふるまい方を振り返る児もいた。

ほとんどの保護者が子どもに対して性教育の必要性を感じていた。実施した性教育プログラムの評価は肯定的なものが多かった。プログラム後数名の児において客観的な行動の変化がみられ、またこのプログラムが性教育に対する意識付けともなった家庭もあった。

プログラムの進行では、具体的な場면을提示し丁寧に進めることで児がより理解しやすいようだった。また数人の児が内容に反応したり拒否的になり支援が難しい児もいた。

V. 考 察

性教育プログラムの試行的実践から、今後実施するうえで考慮すべき点がいくつか浮かび上がってきた。

一つ目は「性に関する場面での見えないルールについて教えること」、二つ目は「人間関係を構築する具体的な方法を教えること」を軸としたプログラムにすることである。

Hellemansらはアスペルガー症候群の青年期について「最大の問題は本質的な衛生観念の欠如、セクシャリティについて率直に話し過ぎること、公の場で生殖器に触れること、他人がいるところでマスターベーションすることである」と述べている¹⁸⁾。また大久保らは「自閉症児・者に対しては健常児・者以上に、適

切な異性とのかかわりに関する系統的な指導と性に関する自己決定の支援が必要である」と述べている¹⁶⁾。このように社会性の問題への対応が必要だと考える。海外では性に関する知識と平行して人間関係やふるまいに関する内容で性教育プログラムが行われており^{19~22)}、性に関する知識とともに、お互いの関係性やコミュニケーションのとり方、人前でのふるまい方を学ぶことに意義があると考えられている。

今回の性教育プログラムで女性との距離を実際に測った演習で多くの男児が「女性との距離の演習がよかった」、「距離の演習が今後の付き合い方の参考になった」と感想を述べており、彼らは今までこういったことがよくわかっていなかったのだということが逆に明らかになった。大久保らの保護者が必要とする性教育の内容の調査で、知的障害を伴わない自閉症(HF)群、知的障害を伴う自閉症(MR)群ともに“社会でのマナー・エチケット”の習得が「今必要」と多くが回答し、“対人関係・男女交際”についてはHF群のほうがより多く「今必要」と回答している¹⁶⁾。マナーやエチケットはPDDの障害特性による特有の課題の一つであると考えられる。自分がおとなの体に変化するという知識はあるが、それが自分に起きたときどう対処すればいいのか、例えば勃起したときにさりげなく隠すようなふるまいをすること、射精(夢精)で下着を汚してしまったときにどうすればいいのか、ということがよくわからないようである。また身体が成長し学年が上がり社会的におとなの男性とみなされるのが、社会や人間関係のうえでどのような意味を持つのがよくわからず、一般の女性との適切な距離が保てず近づき過ぎてしまったり、急に異性の身体に触れるなど不適切な関わり方をして相手に嫌悪感を抱かせていること、許容範囲を過ぎると犯罪ともなりえることに自らの行動をつなげて考えることができていない。したがってPDD児にとって社会での適切なふるまい方や異性との人間関係を構築する支援は、とても重要で必要な支援課題だと考える^{23~25)}。

三つ目は「本人のレディネス(準備状態)をアセスメントすること」である。サポートスタッフや筆者の観察からもPDDの子どもたちはある程度性に関する知識は持ち合わせており善悪の理解はしている男児が多いようだった。しかし本人たちの性について知りたいニーズを聞いてみると「身長について」など一見幼い子のような回答が多かった。本人なりの意図や想い

があるのだろうが、中学生の性教育のニーズとは多少ずれがあるように感じる²⁶⁾。PDD児らの多くは「性」は生殖や男女の社会的役割につながっていくものというよりは、“体が成長すること”、“男女という性別”程度で、精神的や社会的な面までいたる理解や認知ができる児は少ないようである。IQ70以上の高2男児で女性のイメージを「髭が生えない、スカートをはいている」と答える児もいれば、「やさしくいやし系でいつも自分のことを思ってくれる」といった抽象的な表現をできる児もいる。このことは同じ障害診断、ある程度の知的理解力があっても認知や表現方法の個別性が大きいことを感じる。

プログラム進行者の観察でも記したが「性教育」という言葉に抵抗を示す児が数名みられた。林らの知的障害者への調査で「性交について知りたくない」と答えているように、ネガティブな反応を示す者がいることがわかる²⁷⁾。これは彼らの経験から彼らなりの反応(抵抗)をしているのかもしれないが、集団で行う際にこういった反応が出てしまうと本人も周りにもいい影響を与えないだろう。そのため集団の中でプログラムが受けられる状態かどうかも前もって知る必要があるだろう。

一方、保護者からは「身体の変化(二次性徴)への対処方法」、「女性との関わり方」、「性情報への関わり方」についての内容の希望が多く挙がった。これらは本人を一番よく知る保護者が子どもに必要なスキルだと感じることだと思われる。プログラムの内容を決定するうえで本人たちのニーズはプログラム受講の満足度につながるので重要だと考える。しかし“本人にとって必要な社会的スキルは何か”も考える必要があるだろう。

プログラムを行うにあたり、まず本人たちが性に関するどのような知識をどの程度持ち合わせているのか²⁷⁾、どの程度適応的な行動ができているか、プログラムを受けられる状態などのレディネスのアセスメントを主観的・客観的に把握する必要があるだろう。

四つ目は「家庭や学校と連携すること」である²⁸⁾。前述したが個別の差が大きい児たちなので、事前に個々の情報を得る必要がある。またプログラムの効果が感じられるのが家庭なので、結果を知るためにも連携が重要だろう。数人の児に「妹への関わり方に気をつけるようになった」などポジティブな行動の変化がみられたという報告があった。一方、下着に興味を持っ

てしまったという男児がいて母親から相談を受けた。この児の母親と筆者は連絡をとって対応を話し合えたので、男児のそのような行動はおさまった。

さらにプログラムを通じて、主に中学生の保護者の意識に変化がみられた。男児が受けた性教育プログラムの内容をサマーキャンプ後に保護者に知らせたことで、児の性行動に対する家庭での指導の指針が持てたようであった。一貫して継続した指導を行うためには、家庭での保護者の協力や理解は欠かせないだろう。保護者自身も児のことで不安を感じており²⁸⁻³⁰⁾、保護者への支援も必要だと考える。児にとって一番身近な支援者は保護者なので、協同して児を支援していくことを忘れてはならないだろう。

今回の性教育プログラムは、社会行動スキルの一つとして身につけて欲しい項目が抽出された。発達障害児向けの適切な社会行動を習得するためのプログラムをデイキャンプや土曜教室といった形式で行っている実践の報告では^{31,32)}、社会(学校)生活スキルの獲得は集団の中で集中的に行うことで効果があるようだ。今回のように小学生からおとなまで男女が参加するサマーキャンプでは、仲間の行動や先輩のふるまいを観察したりすることができる。また家庭での日常生活では気づかなくても密接した集団の中だと問題行動として目立ち、大学生スタッフからアドバイスを受ける機会が得やすい。これらはPDD児たちにとって普段の家庭や学校生活では得られない機会である。

また今回のプログラムは、行動の変化を導くというよりも認知的な変化を期待したものだ。そのため直ちに現れる行動上の変化は期待していなかったが、プログラム後何らかの行動の変化がみられた男児がいた。このことは本人なりに学習できており、行動変容への刺激が得られたものだと考える。事後のアンケートで、プログラムを肯定的に評価する児が多かった。プログラムを受けてネガティブな感情がわきあがると、その後実施しようとしても受け入れが難しいことが予想される。プログラムを「受けてよかった」というイメージがあることは、将来性行動の支援が必要になった場合、受け入れてもらいやすいのではないだろうか。

しかしネガティブな行動を喚起してしまった事例もあり、事前に“本人のニーズにマッチしているか”を十分に吟味することが、性教育プログラムによって適切な行動の習得を可能にするうえで重要なこととなる

だろう。

今まで障害児を対象にした性教育やその研究は、知的障害が主で問題行動が表面化しやすい男児への対応が多かった³³⁾。その対応の多くも体の違いや生殖についての知識を教授することであり、知識が備わったことが教育の効果とされていた面もあった³⁴⁾。PDD児の場合は知識の足りなさよりも適切なふるまい方が自然に習得できないことや相手の立場に立って考えることの苦手さが問題である。そのため、知識面中心の従来の対応では不十分であるかもしれない。また一般の学校で行われている性教育や研究対象は、主に女子単独か男女のことが多く男子単独の問題を対象にするという場合は少ないようだ³⁵⁾。そのうえ PDD 児はさまざまな学校に在籍しているので³⁶⁾、同一の性教育プログラムをどこでも実施することは難しいだろう。しかも教師は性教育の必要性は感じているものの実施が難しいとも感じており、実践につながりにくさも心配される^{37,38)}。そのため PDD 児が集まるサマーキャンプなどに組み込むのは、障害特性を考慮した性教育プログラムを実施する一つの方法かもしれない。

近年、発達障害の特性のある人たちによる非行（犯罪）の報告が多くされており、その中には性非行（性犯罪）の事例も少なくない^{39,40)}。このようなことを未然に防ぐためにも、性に関する場面で適切な行動を早い時点で身につける必要性は十分にある。今回男児を対象にしたのは、生物学的に PDD の発症が男児に多いこと⁴¹⁾、問題行動が表面化しやすく社会的に問題になりやすいことがある⁴²⁾。今後は女児も対象としていく必要があるが、早急に構築をしなければならないのは男児だろう。

PDD 児たちは安定した思春期を送ることのできる病やひきこもりなど二次障害の発症を防ぐことができ⁴³⁾、将来への準備とすることができるだろう⁴⁴⁾。発達段階やニーズ、さらには障害特性に応じた性教育プログラムは思春期の PDD の子どもやその保護者にとって必要で、今後の生活にも影響する社会行動スキルを身につけるための重要なプログラムであるといえるだろう。

VI. 結 論

思春期の PDD 児にとって発達段階やニーズに応じた性教育プログラムは、今後の生活にも影響する重要なものであるといえる。この性教育プログラムを充実

させるには「性に関する場面での見えないルールについて教えること」、「人間関係を構築する具体的な方法を教えること」、「本人のレディネスをアセスメントすること」、「家庭や学校と連携すること」を考慮することが重要であると考えられる。

第55回日本小児保健学会（2008年9月札幌）にて、本論文の一部を発表した。02-110「思春期広汎性発達障害男児のための性教育プログラムの実践」

文 献

- 1) 古荘純一, 岡田 俊. アスペルガー障害と思春期. 古荘純一. アスペルガー障害とライフステージ. 東京: 診断と治療社, 2007; 108-138.
- 2) 佐々木正美. 恋の仕方がよく分らない. 佐々木正美. 思春期のアスペルガー症候群. 東京: 講談社, 2008; 46-68.
- 3) 吉田一成, 米村あゆみ, 松田信夫, 他. 青年期自閉症の性的行動の分析. 山口大学教育学部研究論叢第3部芸術・体育・教育・心理 1990; 40: 1-40.
- 4) Ruble LA, Nancy J, Dalrymple MS. Social/Sexual Awareness of Persons with Autism: A Parental Perspective. Archives of Sexual Behavior 1993; 22 (3): 229-240.
- 5) 川上ちひろ, 辻井正次. 思春期広汎性発達障害児の性行動の特徴と保護者のニーズの検討. 小児の精神と神経 2009; 49 (2): 163-170.
- 6) 三俣共永, 加瀬 進. 知的障害児への性教育授業実践の推進に関する予備的検討. 東京学芸大学紀要1部門 2003; 54: 183-193.
- 7) 古屋照雄. 性的問題行動への対応. 月刊実践障害児教育 1994; 253: 48-51.
- 8) 原 仁. Q & A 指導に役立つ細心医学からの情報 こんな子どものこんなことが知りたいQ5. 月刊実践障害児教育 2001; 335: 7.
- 9) 山本良典. 異性との対人関係のとり方を学ぶ. 月刊実践障害児教育 2003; 364: 12-14.
- 10) 堀ノ口智子, 小楠真由美, 竹元加奈子, 他. 思春期の知的障害（精神薄弱）児をもつ家庭での性教育の現状調査. 福岡県立看護専門学校看護研究論文集第22集 1999; 183-192.
- 11) 尾原喜美子, 木村龍雄. 障害児学校における性教育の現状と課題—養護教諭を対象とした養護・聾・盲

- 学校の全国的調査一. 高知大学教育学部研究報告第1部第55号 1997; 133-145.
- 12) 文部省. 学校における性教育の基本的な考え方. 学校における性教育の考え方, 進め方. 東京: ぎょうせい, 1999; 1-29.
 - 13) 山本良典. 精神遅滞児・者の性と家族への援助. 発達障害研究 1992; 14 (2): 105-110.
 - 14) 児嶋芳郎. 全国調査にみる性教育の現状と課題. 障害者問題研究 1998; 25 (4): 314-321.
 - 15) 林 隆, 市山高志, 西河美希, 他. 発達障害児に対する性教育の取り組み. 障害者問題研究 1998; 25 (4): 322-329.
 - 16) 大久保賢一, 井上雅彦, 渡辺郁博. 自閉症児・者の性教育に対する保護者のニーズに関する調査研究. 特殊教育学研究 2008; 46 (1): 29-38.
 - 17) 米国精神医学会編, 高橋三郎, 大野 裕, 染矢俊幸訳. DSM-IV精神疾患の診断統計マニュアル. 東京: 医学書院, 1996.
 - 18) Hellemans H, Colson K. Sexual Behavior in High-Functioning Male Adolescents and Young Adults with Autism Spectrum Disorder. Journal of Autism and Developmental Disorders 2007; 37: 260-269.
 - 19) Isabelle Henault, Tony Attwood. Asperger's Syndrome and Sexuality From adolescence through adulthood. London: Jessica Kingsley Publishers, 2006.
 - 20) Mary B Melone, Any l Lettlick. Sex Education at Benhaven. Eric Schopler, Gray B Mesibov. Autism in Adolescents and Adults. New York: Plenum Press, 1983: 169-186.
 - 21) 川上ちひろ, 杉山登志郎. 発達障害がある子どもの「性と関係性の教育」. 子どもの心と学校臨床 2010; 2: 62-70.
 - 22) 大藤恵子. 発達障害者のための性教育. セクシャリティ 2010; 44: 122-125.
 - 23) テンプル・グランディン, ショーン・バロン. ルール⑦人は公の場と私的な場とでは違う行動をとる. 自閉症スペクトラム障害のある人が才能を生かすための人間関係の10のルール. 東京: 明石書店, 2009: 306-328.
 - 24) 川上ちひろ. 異性ともうまく付き合える. 児童心理臨時増刊906通常学級で使える特別支援教育実践のコツ. 東京: 金子書房, 2009; 118-123.
 - 25) 川上ちひろ. 思春期の自閉症スペクトラム障害男児の性教育—性行動の特徴及び性と関係性の教育プログラム. 辻井正次, 氏田照子. 発達障害の基本理解4. 東京: 金子書房, 2010; 95-99.
 - 26) 宮崎つた子, 我部山キヨ子, 森 千春. 性教育経験の受け止めと今後の方向性. 思春期学 2004; 22 (3): 345-351.
 - 27) 林真由美, 荒木美香子, 大橋一友. 知的障害を持つ成人男性の性ニーズと性知識の関する調査. 発達障害研究 2008; 30 (2): 121-127.
 - 28) 木戸久美子, 林 隆, 中村仁志, 他. 知的障害をもつ子どもの性に関する親の意識についての研究. 発達障害研究 2004; 26 (1): 38-51.
 - 29) 宮原春美, 相川勝代. 知的障害児・者のセクシャリティに関する調査. 長崎大学医療技術短期大学紀要 2001; 14 (1): 61-64.
 - 30) Stokes MA, Kaur A. High-functioning autism and sexuality A parental perspective. Autism 2005; 9 (3): 266-289.
 - 31) 山下裕史朗, 向笠章子, 本田由布子, 他. 1部概論. くるめSTP書籍プロジェクトチーム. ADHDをもつ子どものための支援プログラム. 東京: 遠見書房, 2010; 10-45.
 - 32) 岡本祐佳, 角 愛鹿, 平野晋吾, 他. 広汎性発達障害児の基本・個別スキルの獲得に向けた社会指導. 高知大学教育学部研究報告 2010; 70: 11-20.
 - 33) 原恵美子. 知的障害児に対する特別支援学校における性教育実施の状況と, 教諭と保護者の意識. 治療教育研究 2010; 30: 61-69.
 - 34) 児嶋芳郎, 越野和之, 大久保哲夫. 知的障害児の性教育の関する一考察—養護学校全国調査より—. 奈良教育大学紀要 1996; 45 (1): 201-215.
 - 35) 岩室紳也. 男子思春期性教育の現状. 思春期学 2006; 24 (4): 619-622.
 - 36) 内野智之, 高橋 智. 高校等に在籍する軽度発達障害児の教育実態—神奈川県の高校等への質問紙調査から—. 東京学芸大学紀要 2006; 57: 231-252.
 - 37) 江田裕介, 田川元康, 松本美穂. 障害児の性および性教育に対する教師の意識. 上越教育大学障害児教育実践センター紀要 2001; 6: 19-27.
 - 38) 木戸久美子, 林 隆, 吉田一成. 発達障害児に対する性教育の現状—指導者の性に関する知識・関心と指導内容の関係—. 研究論叢第3部芸術・体育・教育・

- 心理. 1998 ; 48 : 271-282.
- 39) 杉山登志郎, 川上ちひろ. 高機能広汎性発達障害児に見られる行為障害と犯罪. 杉山登志郎. そだちの臨床—発達精神病理学の新天地—. 東京:日本評論社, 2009 : 48-62.
- 40) Baron-Cohen S. An assessment of violence in a young man with asperger's syndrome. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 1988 ; 29 (3) : 351-360.
- 41) ウタ・フリス. 生物学的基盤. 自閉症とアスペルガー症候群. 東京 ; 東京書籍, 1996 ; 41-42.
- 42) 長浜亜希子. 知的障害者の性行動をそれに関わる指導員の対処. 北海道医療大学看護福祉学部紀要 2003 ; 10 : 17-24.
- 43) 古荘純一. 思春期と精神医学的な問題, 軽度発達障害を持つ子どもとその家族への心理・社会的支援. 軽度発達障害と思春期. 東京 ; 明石書店, 2006 ; 78-100, 121-128.
- 44) パトリシア・ハウリン. 自閉症の人は成人期にどうなるか. 自閉症成人期に向けての準備能力が高い自閉症の人を中心に. 東京 ; ぶどう社, 2000 : 20-38.

[Summary]

At puberty, some boys with pervasive developmental disorder (PDD) pose particular problems in terms of their sexual behaviour and how this can be handled and controlled. In Japan, however, sex education and research for coping with sexual behaviour related to the characteristics of PDD has often lacked coherency.

In this study, a programme that took into account the characteristics of this disorder was planned and carried out, based on a survey of the parents of adolescent boys with PDD.

The results of this showed that the majority of the assessments made both by the boys and the other members of their family were positive. There was also a change in the behaviour and consciousness of a number of boys and parents.

The necessity of developing a sex education programme which focuses specifically on the characteristics of boys with PDD and addresses issues that include their relationships with women also became clearer.

[Key words]

sex education, pervasive developmental disorder, male, adolescents